アリストパネスのソクラテス像

助教授　増田哲明

I

私たちのあの高貴なソクラテス像は主として天才プラトンの筆に由来するものなのであるが、同時代人の眼には、しかし、ソクラテスはそのように美しくばかりには映じていなかつたように思はれるのである。此のことを何よりも雄辯に物語るものはアテナイ民主制の下で起つた彼の処刑という出来事なのである。彼を最大の義人・最高の智者として証しすることが、プラトンはじめ彼の門下の人達にとつて最初の仕事であつたわけなのであつて、この事はイエス死後の直弟子達にとつて十字架にかけられた師を救い主として宣べ伝へることが課題であつた事情と似ているのである。

ところで、ソクラテスを理解するという事は実はなかなか困難な問題なのであつて、彼の存在自体がどうやら一箇の謎のようにも感ぜられるのである。一般の世人が彼の本質に躓くということは如何にも当り前の事とも言えるのであつて、シレノス的な又サチユロス的なソクラテスの風貌は同時代人にとつてばかりでなく後世の人達にとつても永遠に一つのイロニーたることを失はないのではあるまいか。

彼に対する大衆の疑惑や誤解というものが彼を殺す重大な原因として、プラトンの「辯明」において取り上げられているのである。

このいわば無名の彈劾者の中からは、唯一人の喜劇詩人の名があげられうるにすぎないと語られている。(1) アリストパネスである。このような大衆の書かれざる訴状の要点と見なされる事柄は、

『ソクラテスは不正をなす。彼はしきりと地下ならびに天上の事象を探求し、不正の論を勝たしめ、且つ此等の事柄を人に教うる者である。』(2)

と言うにある。アリストパネスの劇にあつては、

『ソクラテスなる者が舞台の上を歩き廻つて、私のいささかも理解することのない事柄について妄語を弄するのである。』(3)

と語られる。このような言葉によつて、私たちはアリストパネスの喜劇のうちに現はれるソクラテス像が、多くの同時代人に映じていたそれに近いものであると考えてよいであろう。ところでソクラテスによつて言及されている喜劇というのは「雲」であることは、「辯明」のなかに引用された語句によつても明白なことなのである。では「雲」とはどんな喜劇なのであろうか。

註 1　プラトン「辯明」18d1～2

註 2　同　　19b4～c1

註 3　同　　19c2～5

II

「雲」はソクラテスについての最古の文献でもある点に一つの興味がある。紀元前423年の上演であるから、ソクラテスは56歳頃であり、アリストパネスはまだ30には達してはいない、またプラトンは3歳程の幼児であり、クセノポンは11歳位の子供である。アリストパネスは50台のソクラテスを観察する多くの機会を持つていたであろうと考えられるのであるが、プラトンの「饗宴」では両者親しく談話を交はしているのである。

このような作者がソクラテスを舞台の上におどらせることになるのであるが、その前年には彼は「騎士」を上演し、民衆指導者クレオンに対する大胆な攻撃を展開しているのであつて、当時のア

テナイが持ち得ていた言論の自由というものは私たちを驚かせるものがある。此の「騎士」につづいて「雲」のソクラテスが登場するという事は、当時すでにソクラテスが著名の人物であつたことを語るものなのであり、又私たちがプラトンの対話篇から推察し得る所では、ギリシヤの学問界における、いわば国際的存在でもあつたようである。

さてこの「雲」はどのような喜劇なのであろうか。有名人ソクラテスについての喜劇であるには違いないが、本当の主人公は田舎者のストレプシアデスであつて、その無知な貪欲が報いを受けるところに、まとまつた筋としての面白味がある。以下私たちは、劇の荒筋を辿つて、そこに示されたソクラテス像を追つてゆくことにする。

息子の競馬狂と妻の貴族趣味のために負債にくるしむストレプシアデスは夜長を眠られぬままに返済回避の名案を思い付く。それは悴のペイヂツピデスをソクラテスの許に入学せしめて、不正の言論を学ばせ、この言論の功徳によつて返済を免れるという事なのである。そこで彼は息子を起し、話しを切り出すことになる。ストレプシアデスによると、ソクラテスの家は「賢い魂をもつた人達の思索所」と呼ばれ（4）、そこに住む人たちは「天は火消しカマドであり、人間はその中の燃えがらである。」（5）という説を人に信じさせる者であつて、「金さえ払えば、正・不正に論なく、言論において勝つ術を授ける。」（6）という評判なのである。これを聞いて、息子は彼等の名前を問うのであるが、親父は「大した思想家で立派な紳士だ。」（7）とだけ答えて、その名を言い澁る風なので、息子は気づいて、「紳士どころか、怪しからぬ代物で、嘘つきの、蒼白い、靴もはかない連中だ。」（8）と言い、不幸なソクラテスとカイレポンの一味だと叫ぶのである。そんな所に入れられて、顔色のやつれたところを騎士仲間に見られでもした日には恥かしくて耐らないだろう、と言つて家を出てゆくのである。

これが私達がこの喜劇においてソクラテス派について耳にする評判なのである。顔色も悪く、靴も穿かない、あはれな人間たちで、あらぬことを語る思想家なのである。父親のストレプシアデスが賢いとか紳士だとかほめるのも、もとより本心ではなく、金を取つて不正の言論を教えもする人間達のことを考えているのであるから、彼等に対する評価は息子と異る所はないのである。現世的なペイヂツピデスのような人間が少しも見習うことを欲しないような人たち、つまり不幸な人間なのである。それでは、このペイヂツピデスのようなソクラテスに対する評価は真実に存在していたのだろうか。どうも、それが世人一般の感じであつたようである。

先づ顔色の悪いということであるが、カイレポンについては事実であつたようであつて、アリストパネスの他の作品「鳥」においては蝙蝠（＝夜のもの）とあだ名されており又「雲」の後の箇所では「半死人」と形容されているのである。（9）また靴をはくことが稀であつた事は、プラトンの「饗宴」に見られるソクラテスについての事実なのである。（10）またソクラテス的生活を世人が不幸なものと感じていたこともこの「饗宴」のうちからも、うかがえる事柄なので、そこではソクラテスの崇拝者アポロドロスをしてプラトンは次のように言はせているのである。

「フイロソフイアをする位なら寧ろ他のどんな仕事をしてもその方がましだ思う。」（11）また「君達の方ではまた恐らく僕を不幸な者と思つている。」（12）すると私達はペイヂツピデスの言葉の中に大方の世人の感情の表白を見ると言つていいのである。

天を半円形の火消しカマドに似たものとする説は「鳥」の中では天文学者メトンの言葉の中に見られるものであつて（13）、ソクラテスのものでは無論ない。次に不正の論を教える者というのは勿論誤解であるのであるが、ソクラテスが一種の雄辯家であつたことは事実なのであり、ことにその論法において相手の矛盾をあらはならしめる鋭さは両刀の剣として悪用されうる面もあるのである。しかし金を取つて教えるということはソクラテスについての事実ではなく、プロタゴラスをはじめとするいわゆるソピスト達の事に属する。それはともかくとして、私達はここに可なりにソク

ラテスの生活の事実からの反響を聞く思いがするのである。とりわけ「不幸なソクラテス」(ho kakodaimôn Socrates)(14) なる言葉は意味深い味いをもつように思はれるのであつて、ソクラテスはソクラテス自身にとつては正にその逆の幸福なソクラテス(ho eudaimôn Socrates)であつたであろう。そうしてこの事は幸福なる語の中に何を理解するかの相違から来るのであつて、ソクラテスと世人は丁度逆なものを考えているのである。プラトンのパイドン篇では、『正しく愛智する者は死を練習するのであつて、彼等は人間のうちで死を怖れることの最も少い者である。』(15) と語られている。世人は肉体的快楽のない生活を死にも等しいと考えるであろうが、それこそピロソピアへの生である。一方の者の生は他方の者には死に見え、他方の者の生は一方の者にとつて死を意味しているのであろうか。このような世とソクラテスとの対照は周知の事実である彼の貧乏のなかに示されると言いうるであろう。このような彼からアンチステネスを通して、あの有名な犬儒派のシノペのヂオゲネスが出てくることも理解されるのである。

註 4 「雲」94、魂とここで言はれるギリシヤ語 Psychê はまた死靈をも意味する。
註 5 同 上 95〜97
註 6 同 上 98〜99
註 7 同 上 101
註 8 同 上 102〜104
註 9 「鳥」 1296
「雲」 504
註10 プラトン「饗宴」174a3—4
註11 同 上 173a2〜3
註12 同 上 173d1〜2
註13 「鳥」 1000〜1001
註14 「雲」 104
註15 プラトン「パイドン」67e

Ⅲ

ストレプシアデスは自身で学ぶ決心をして思索所の門を叩く。その乱暴な物音に門番の門下生は「折角見つけ出した思想を流産させて了つた。」(16) と言つてこぼす。さてこの門下生によつて語られるソクラテス達の驚嘆すべき智慧というのは、

(1) 蚤はその足の長さの何倍を跳ぶのか。

(2) 蚊はその口で鳴くのか、尻でなくのか。(17)

という問題の解決法に関するものなのである。それにつづいて語られるソクラテスの逸話は、

(イ) 月の軌道を口をあけて一心に観察していたソクラテスがトカゲに屋根から小便をかけられたこと。

(ロ) 机の上に細かい灰をまいて、尖つた鉄串の尖を曲げ、コンパス様に手にとつて、幾何学すると見せかけて、相撲場から他人の上衣を失敬したこと。(18)

(1) と (2) はソクラテスの学問の深遠なあるいは煩細な例で田舎者を感心させる。(イ) の話しで、この俗人は意地の悪い喜びを洩らし、(ロ) の話しには「ソクラテスの智慧はタレースの遠く及ぶところではない。」(19) と嘆声を放つのである。そこで直ちにソクラテスとの会見を望むことになるので、いよいよ扉は開かれ、ソクラテス学校の内部が示される。そこに彼が見るものは或る者は地にかがんで地下の闇をさぐり、また或る者は尻を天に向けて天文学に余念のない姿で、これら門下生の様子はピユロスから連れて来られたスパルタの捕虜然たる衰えた様子なのである。

ところで、門番のソクラテス学徒が最初に言う「見つけ出した思想を流産して了つた。」という

語は私たちにソクラテスの有名な産婆法を想起せしめるものがある。又天文学も門下生各自が自身の力によつて学ぶようにと教えられていると語られるのであつて、いよいよ私たちはソクラテスの教育法の重要な面に觸れる思いがするのであるが、後の箇所ではストレプシアデスがこの産婆法を舞台の上で施されることになるのであつて、そこに見事なソクラテスの産婆法のカリカチアを見るのである。

観客はこの箇所でペイデッピデスによつて暗示せられたいわば蒼白きインテリの姿を見ていることになるので、スパルタの捕虜にも似た哀れさも、またストレプシアデスを感嘆せしめたソクラテスの盗みも夕食代を稼ぐためのものであつて、原因は一つに生活の貧困にあるのである。学問に浮身をやつす人間への浮世の風は冷いものなのであろうが、そこにはまた可なりの嘲笑も交つていることなのである。

ところでこの学園で学ばれているのは幾何学や天文学や世界地図などの諸学なので、これらは「辯明」のなかでソクラテスによつて否定されているものなのであるが、思想界の才一人者と目せられるソクラテスにこれらをも属せしめることを作者はそれほど不自然とは感じなかつたことなのであろう。またソクラテス自身ピタゴラス派の人とも親交があり、プラトンの「パイドン篇」には若い頃は自然学に沒頭していた、(20) と述懐されているのであり、アテナイにはアナクサゴラスの影響も大きく、且つそのアテナイに残した弟子アルケラオスに彼が師事したという伝承も彼の持ち前の学問好きから考へれば極めて有りうべきことなのである。又彼をめぐる仲間達には立派な数学者の居たこともプラトンの「テアイテトス篇」を見れば明かであるし、様々の教養人との広い交際もあるのであるから、ソクラテスが此等の学に通じていたことは疑いのない所であろう。ただ彼はこれを人生の才一義とは見ないまでの話しであつて、彼がこれらの学について語ることを好まなかつたのはその故なのである。

ところで、門下生の語る言葉のなかに、各自の見出した思想は、これを門外の人に語ることを許されないとあるのは、私たちのいわゆる街頭の哲学者としてのソクラテス像に矛盾する秘密教的集団の閉鎖性を思はせるものであるが、ソクラテスのサークルの人々は世間一般の眼から見れば矢張り特殊の存在と見られることが多かつたことと考えられるのであつて、世俗との距離も思わねばならない。

それにしても、アリストパネスのソクラテス学校の構想は南イタリアのピユタゴラス教団の事実に関聯があるとも考えられる。

ソクラテスの門下生についての話しもタレース的逸話の要素をもつものもあつて、一般に天上の哲学者の姿と見做されるタイプに他ならない。

註16　「雲」　137
註17　同　上　144—164
註18　同　上　171～179
註19　同　上　180
註20　プラトン「パイドン篇」97b9以下

Ⅳ

さてソクラテスはと見ると、吊り籠に乘つ、『宙を歩み、太陽について思いを凝らしている。』(21) と称するのである。その理由として、

『高尚微妙な思想というものは、これと同質の空気と混り合せておかないと、天上の事象については正しい発見が出来ない。若し低い地上から観察するならば、地が思想の汁を引きつけるので発見ができないのである。』(22) と言う。この説明を与えてからソクラテスは老人の来意を尋ねる。

ストレプシアデスは、不正の論を教えてくれれば、望み通りの謝礼を払うことを神々にかけて誓う、と言う。するとソクラテスは、神々という言葉を捉えて『神々は金銭ではない。』(23) と言つて話題を別の方向へそらしてゆく。

ソクラテスは老人を淨床に坐らせ、冠をかぶせ、おごそかな入社の儀式に取りかかるので、この式の目的は新入生にソクラテス一派のダイモンである雲への宣誓へと導くことにある。ソクラテスはまづ『主にして王なる、地を抱く限りなき空気、輝く青空、ならびに電光のかしこき神なる雲』(24) に対する祈りを捧げる。この祈りに応じて、雲はオケアノスから次才にアテナイへと動いてくる。雲は、ソクラテスによると、仮かざる者の神なのであつて、ソピスト達に知識・思想・言論のさまざまなこちたき技を授けて、彼等を養うのである。この雲の精は来つてソクラテスに告げる。

『汝、最も微妙高尚なる駄辯宗の神官よ、汝の望む所を我らに語れ。
天上についての今日の智者のうち、
その智、その識の故にプロデコスを除いて、唯汝にのみその祈りをきかん。
如何となれば、路ゆくに汝は、
高く首をあげ、眼をくばり、
靴をはくことなく、多くの苦を忍び、
我らの故に傲然たるが故に。』(25)

雲は雷鳴をとどろかせ、悴然として雨を降らせる。ここでソクラテスは、雲のみが神であつて、ゼウスは存在しない、ゼウスと人が呼ぶものは青空のデーノス（＝渦巻）であると説明する。また雷鳴も電光もゼウスの業でなく、雲の作用であるとして、自然学的説明を与えるのである。雷鳴と言うのは、『雲が多量の水にみたされて、運動を起し、必然によつて雨水を抱いて中空に垂れ来つて、互に激しく衝突し合い、破裂して凄じい音響を発する。』(26) ことだと言い、またストレプシアデスの提出する、電光はゼウスが偽誓者を打つのであるという、神話的倫理的解釈に代えて、同様な自然学的説明を与える。電光というのは、『乾燥した空気が空に昇り、雲の中に閉ぢこめられ、膀胱のように、雲をふくらませ、強い圧力を受ける結果、外部に向つて、すさまじい勢ひを以て破裂せざるをえなくなり、その力と速度のために自ら発火する。』(27) ものなのだと言う。

かくて「カオスと雲と舌」(28) との三者以外に神は存在しないという教義が宣言せられる。これを聞いて、ストレプシアデスは、今後は他の神々に出会つても、決して語りかけもせず、献げ物もあげず、お神酒も香液も注いでやらない、と言う。そこで雲の精に対する苦行の宣誓が行はれ、式は終了となつて、彼の教育はソクラテスに任せられる。

さて私たちは始めて舞台の上にソクラテスを見ることになるのであるが、その彼は吊し上げられた籠の中で、「宙を歩む」(aerobatô) と称するので観客を哄笑させずにはおかない。この天上の哲学者は俗人の切り出す金銭提供の話しに一顧を与える風もなく、直ちに、雲宗への改宗の行事にとりかかる。新しい宗教はまた新しい科学に他ならないのであつて、ゼウスをデーノスと解するものなのである。(29)

この科学の宗教は旧い伝統的国民宗教を否定するものであつて、理論的には無神論、実践的には道徳の破壊と世俗には見えるものなのである。近代の歴史に見られる科学と神学の争いの古代的形態であつて、自由思想家と目せられるソクラテスは、ここに危険人物としての象徴と化するわけであつて、実在の彼の外面的特徴——横目を使うことや、威張つたような歩き振り——と結合せられる時、不利な結果をもたらしてくるものである。史的ソクラテスの伝統的宗教に対する態度はラヂカルなものではなく、保守的要素を残すものであることは、プラトンやクセノポンを読む者にとつては明な事なのであるが、彼の合理主義の強い一面のみが世人に強く印象づけられる結果、瀆神の

疑惑をもつて見られるに至るのであろう。アリストパネスが、ここでソクラテスを新しき神を立てるものとした事は「辯明」において見られるように、後にメレトスの訴状の中にあらはれる一つの罪名なのであるが、ソクラテスがそこでダイモニオンの声をあげていることは、彼の宗教的態度を知るに興味あることなのである。

註21 「雲」 359～364
註22 同 上 228～234
註23 同 上 248
註24 同 上 264～265
註25 同 上 359～364
註26 同 上 375～378
註27 同 上 404～407
註28 同 上 424
註29 同 上 379

V

ストレプシアデスの教育は先づ計算術から、次に音楽という順となるが、頑な老人の世俗の頭は到底学問を受けつけるようなものではなく、早く不正の論を教えてくれるように乞うのであるが、ソクラテスはそれより先に学ぶべきものとして文法学に移る。それを終えると、老人を床にねかせて、『自らの事柄を思案せよ。』(30) と命じて、例の産婆法に取りかかる。

『よく思案し、よく調べてみよ。自分というものを引き緊めて、あちらこちらと自身を回転させて見よ。さて、考えが行き詰つたら、直ちに他の思案に飛び移れ。眠りたがる眼からは眠りを遠ざけておけ。』(31)

ところが、ストレプシアデスは南京虫に攻められて、思案するどころではないので、早く不正の論を教えてくれとせがむのであるが、ソクラテスは依然として、思想生産の方法上の助言を与えるだけなのである。

『微に従つて軽妙な思考を自由に振舞はせよ、物事を正しく分析し、観察しながら。』(32)

哀れな老人は、この思想のお産の床にあつて、苦しまぎれの珍案を提出することになるが、ソクラテスは老人の物覚えの悪さを理由に追出して了う。そこでこの老人は雲の精の助言に従つて、息子を代つてソクラテスの所へ連れて来る。するとソクラテスはその息子に正と不正の論は自分自身で学ぶがよいと言つて身を退く。舞台の上では正論と不正論のアゴンが進行し、伝統的道徳を主張する正論は不正の論のソピスティークに打負かされて了う。かくてペイヂツピデスが不正の言論をものにしたことが示されるので、その後更にソクラテスによつて仕上げの教育を受けた上、立派なソピストとなつて家に帰る。

ストレプシアデスに施されるソクラテスの産婆法は見事に失敗に終るわけであるが、その際与えられる助言は、それに纏はせられている可笑味の中にも注目すべき事柄を暗示しているようである。「行詰る」とか「正しく分析し観察して」とか、これらは私たちがプラトンの対話篇の中に出会う言葉であつて、ソクラテスの対話法の反響を聞く思いがするのであるが、更に「自分の事柄を思案せよ。」という指図も、プロトレプチコスとして人に自己の魂の面倒を見るように説いたソクラテスの口吻を思わしめるものがあつて、恐らくそこにはソクラテスの実際の対話のパロヂイがあるのではなかろうか。

また正論と不正論がソクラテスが直接教えることになつていないのは、産婆法の精神によるものとも、或いはその内容的責任をソクラテスに帰することを避けるためのものであるのか、それとも単に正論と不正論のアゴンを舞台の正面に打出すための劇作上の工夫によるのか、いづれとも考へ

られるのであるが、このアゴンの内容は全くアリストパネス的であつて、彼自身は伝統的道徳を正論と名づけて、その側に立つのである。

ところで、このアゴンの部分は上演当時のものでなく、アリストパネスによる後の修正箇所の一つであると、古写本の或るものは推定しているのであるが、ソクラテス像には殆んど影響を持たぬものと見られる。不正の言論とソクラテスの関係は、この劇のままに見れば、余り積極的とは見られないのであるが、矢張り詭辯に対する責めの一半をソクラテスに負はせていることは筋そのものからも肯定さるべきことと考へられる。先にタレース的天上の哲学者としてソクラテスをえがき、今ここに不正の言論の教師とすることは一見そぐはぬように考へられるが、ソクラテスの存在には超俗性と言論術との二面のあつたことも顕著な事実なのである。堕落した言論の術、つまりソピステイークとソクラテスのゼノン的論理との間に世人が混同を見たとしても、それは不思議なことではないのである。ともにそれ等はエレア派が発展せしめた論理に由来するものなのである。ソピステイークとの厳密な区別において、哲学の真の方法としてのヂアレクテイークを、ソクラテスの対話法の中に見出すことはプラトンの仕事であつて、アリストパネスの関心事ではない。

ただこの劇を通じて、私たちはソクラテスの産婆法が一貫して流れていることに多大の興味を覚えるのである。

註30　「雲」　695
註31　同　上　700～705
註32　同　上　740～742

Ⅵ

家に帰された息子は父親に詭辯を授けて、借金取りをしりぞけさ、ストレプシアデスを大いに喜ばせるのであるが、その祝いの食事の席で、シモニデスとアイスキユロスを愛好する父親と新しいエウリピデスの崇拝者である息子の間に争いが起り、子が父を欧るという騒ぎになる。ところが息子は新しく仕込んだ学問によつて父親欧打の正当性を主張するのであつて、その論旨は次のようなものである。

1.　父は子の為めを思うて子を打つと言うなら、打つことは為めを思うということなのであるから、子が父を打つこともまた正しいことである。

2.　子もまた自由な市民としての生れであつて奴隷ではないのである以上は、父親の身体は欧打を免れており、子の身体だけが欧打を蒙るということは然るべきことであろうか。（ここで「子は嘆き、父は嘆げかぬことはふさわしきことであろうか。」というエウリピデスの句が引用される。）

3.　また若し子は欧打に価する存在なのであるという考へが正しいとすれば、老人というものは、いわば二倍の子供とも言うべきものであるから、その年寄りが過ちを犯すならば、子供以上にそれだけしたたか罰してやることが相応しいのである。(33)

ここで、父親は法は何処にあつても子が父を打つことを許してはいないと抗議するのであるが、息子は新しい哲学によつてこれに反駁を加えるのである。

1.　最初に法を立てたものは我々と同じ人間ではなかつたか。そうして、それを古くからのものであると言つて人々を説得したのではないか。そこで反対に、子が父を打ち返すことを新しく法として立てることが我々に許されぬことであろうか。

2.　法が立てられる以前に受けた欧打については、これを問わず勝手に欧り合はせておくとして、眼を自然界に転じて見ると、鶏やその他の動物は父親を攻げきするのであつて、彼等が我々人間と異る点は我々が議案を投票によつて決するという以外に何かあるであろうか。(34)

かくてストレプシアデスは息子にソクラテスの新教育を受けさせたことを後悔するのであつて、

息子に父祖伝来の神ゼウスを敬えと言うのであるが、息子はゼウスの存在を否定し、前にも觸れたあのヂーノス（＝渦卷）説を持ち出すので、父親は嘆いて、ソクラテスによつて欺かれヂーノス（＝土製の壺）を神と思つていたとは何と愚かなことであつたかというのである。ここで突然、観客はソクラテスのヂーノス（渦卷）はストレプシアデスには土の壺と取られていたことを知るのである。つづく此の劇の終幕はソクラテス学校の焼打ちで、屋根に上つたストレプシアデスは、何をしているのかと問はれて、『宙を歩んでいるのだ。』と皮肉な答えをする。ソクラテスとカイレポンに向つて叫ばれる彼の言葉は

『何故にお前たちは学問して、神を蔑ろにし、月の住いを眺めるのか。奴等を追つぱらへ、投げ出せ、打ちのめせ。多くの事、とりわけ神を瀆した報いに。』(35)

と言う烈しいものになつている。

この大胆な焼打ちという構想も作者の後の修正箇所と考へられ、ソクラテスの取扱いがより苛酷になつたと言はれるのであるが、この劇の主人公の最後の言葉に見える瀆神という語はなかなかに強い印象を残すものであろう。

さて、この終りの部分に私たちはソソソテスの新教育の道徳的効果を見るわけになるのである。その効果というのは息子が父親を欧るという、甚だわかりのよい、また喜劇的でもある出来事に象徴されているのである。このような道徳的墮落を正当づける言論の術というものを新しい時代のソピスト的教育の結果として非難することは、ひとりアリストパネスにかぎらず、世の一般の父親達の傾向とみられるのである。こうして道徳的墮落を個人としてのソピスト達に帰することは、もとより甚だしい偏見であつてソピストたちこそ新しい時代の生んだ子であるのであるが、ストレプシアデスの復讐にも見るように、特定の人間をとらえて、これを罪することは、また世の中の一般の習いなのかも知れない。

私たちはストレプシアデスを笑つてばかりはいられないわけであつて、この俗人の憎悪の対象となるソクラテスは二十数年後には現実に罰せられることになるのである。

ところでペイヂツピデスの呈出する法の哲学と見られる議論は私たちに、この時代に思想上の問題となつていたピユシスとノモスの対立を思わしめるものなのであつて、倫理の世界に大きな影響をもつものなのである。プラトンの対話篇、例えば「国家篇」に見えるトラシユマコスの正義についての見解や「ゴルギアス篇」に見られるポロスの考へ方などもこれと関聯するものなのであるが、ソクラテスが斗う相手は実は他ならぬこの誤まられたピユシス的見解なのである。ところがこのようなピユシス的見解というものは特に誰彼の個人的考へというよりは、むしろ野心的な現実人が闇々裡に抱いているところのものなのである。このような力に生きる現実人から見るならば、ソクラテスはまた別の意味において、あはれむべき存在として嘲笑されねばならぬであろう。ストレプシアデス的人間から見るならば、ソクラテスは理解も及ばない世界に住む知識人として嫉視され疑惑視される人間なのであるが、強い現実人からすれば愚かな哀れな存在として笑はれる人間でもあるのである。いづれにしろ、ソクラテスなる人間というものは現実の社会にあつて、正しく理解されることを万人に求めうるような存在なのではないのである。ともあれ、アリストパネスがこの劇にえがくソクラテスの像は依然として愛智者の姿であつて、世俗の利慾にかかわる人間ではない。にもかかわらず、あるいは、それ故に危険視される存在であることを示しているのである。このように考へるとき「雲」はストレプシアデスの喜劇ではあつても、ソクラテスの喜劇ではなく、まさにその反対のもの、ソクラテスの悲劇となる。そうして、このような悲劇はソクラテスを以て終るということはない、というのがアポロギアにおけるソクラテスの言明なのである。(36)

註33　「雲」　1410～1419

註34 「雲」　1421～29
註35 同　上　1506～1509
註36 プラトン「辯明」28a9～b

Ⅶ

アリストパネスがソクラテスを舞台上の人物としたのは「雲」だけであるが、他の作品において数箇所で言及している。彼のソクラテス像は「雲」以後何等かの変更を見せているだろうか。

「鳥」は「雲」の九年後の作品である。このなかで「雲」において「半死人」と形容されたカイレポンは「蝙蝠」（＝夜のもの）とあだ名されている。(37) 彼のやつれた暗い感じの風貌から来たものであろう。この作品は上空に空想的な鳥の王国を理想的に建設するという筋なのであるが、この国へやつてくるアテナイからの伝令の報告のなかで、この国が立てられる以前はアテナイでは、

『みんながラコニア風にかぶれ、髪を延ばし、おなかをすかし、入浴もしないで、ソクラテスをまね、杖をもつてあるいていた。』ところが今では法律マニアになつている、という箇所がある。(38) これで見ると、ソクラテスはラコニア風の生活を送つていることになる。そうして私たちはプラトンの「饗宴」などから飢に耐え、入浴もあまりしないことがソクラテスの生活の外面的特徴に属していたことを知りうるのであつて、ソクラテス的生活態度はラコニア風であると見なされたものであろう。そうして「雲」にあつても、雲の信者は実に多くの困苦に耐えることが要請されているので、ソクラテスのスパルタ風は人の目につきやすい事柄であつたと思われる。しかしここに諷刺されているスパルタ的ソクラテス的生活は浮薄な法律狂のアテナイ人との対比においては、むしろ美点なのかもしれない。

筋にあまり関係のないコロスのなかで、もう一度ソクラテスとカイレポンのことが言及されている。

『蔭足人らの国に面して一つの沼があつて、そこで入浴しないソクラテスが死靈を呪法でよび寄せている。そこへペイサンドロスが、存命中に彼から去つて行つた靈魂を見たいと思つて、犠牲に淨い駱駝の羊をつれてやつて来る。羊の咽喉をオデュッセウスのように切り開いたまま、（臆病風にふかれて）逃げ去つて了つた。するとそこへ下から羊の血めがけてやつてくるのはあの蝙蝠のカイレポンだ。』(39)

ペイサンドロスは臆病者の政治家としては引き合いに出されているのであるが、遠く地の果てにあると想像された蔭足人の伝説的国の沼沢の傍で、ソクラテスが死靈をよびよせる姿や血を吸いに上つてくる蝙蝠のカイレポンの様子を思い浮べるのは不気味なことである。このような死を聯想せしめる暗さをソクラテスやカイレポンに帰するのは、アリストパネスがソクラテス的生活を依然として半死人的なものとして考えているからなのであろう。

「蛙」は「鳥」より更に九年後の405年に上演された作品である。これはアイスキユロスとエウリピデスを舞台に登場させ、互にその文学を批判させるというテーマのものであるが、そのフィナーレのところで，コロスの歌う中に、

『ソクラテスの傍に坐して、無駄口を叩くのは、うるわしからぬこと、ムーサの技を放擲し、悲劇の技の最大なるものをなおざりになして。いかつい言葉をひつかきまわし、雑言に無為の時をすごすは愚か者のことである。』(40)

これはエウリピデスに対する非難なのであつて、ソクラテスはそのおつき合いに引出されているのである。この偉大な詩人がソクラテスの傍に坐して対談する如く言はれているが、もし此のことが事実であつたなら目ざましい出来事と言えるのであるが、このようなことについてはプラトンも

クセノポンも沈黙しているのであり事実のこととは考へられていない。同時代に生きながら、この両人が会談の機をもたなかつたと考えることは後世の私たちにとつて残念なことなのであるが、ここに見られるようにアリストパネスにとつては新しい時代の精神を代表する——一方は文芸の、他方は思想の世界における——人物と考へられているのである。アリストパネスは、しかし、この両者の思想上の親近性——合理的批判主義——の中に時代の危険な堕落を見るのである。彼は両者の偉大な才能については、これを認めるにやぶさかではないのであろうが、この両人の影響を好ましいものとは感じてはいないのである。モラリスト・アリストパネスは懐古的である。彼はソクラテスを無駄口を叩く（lalein）者として語るに終始している。たしかにソクラテスの生涯は語ることのなかにすごされたのであつて、彼の生甲斐もその意義も語ることにつきるのである。一日として語ることをやめないことがソクラテスの念願でもあつたであろう。それは学者が一日として学において進歩するのを願うと同じであるというよりは、より深い意味においてそうなのである。愛智は閑暇から生れる。この閑暇の深い意味はプラトンによつて開明せられるところなのであるが、アリストパネスにおいては、それは lalein の意味しかもたないかの如くである。「雲」において言われたようにソクラテスは駄辯宗の高僧となる。プラトンと、アリストパネスのソクラテス像は甚しい相違を示す。にもかゝわらず、私たちはそれらの中に一人の人物ソクラテスを見ることが出来るように思う。

註37　アリストパネス「鳥」1296
註38　同　　上　　1281～1283
註39　同　　上　　1553～1564
註40　アリストパネス「蛙」1491～1499

（追記）ギリシヤ人の人名中の長音は日本人にとつて読み易いように多くの場合短音にかえた。また同様の意図から ph と p の音を区別して表記しなかつた。その他類似の点についても諒とされたい。なお、この論文をかくに当つては、田中美知太郎博士の「雲のソクラテス」（「ギリシヤ人の智慧」の中にある）に負う所が多かつたことを附記する。